

# 私が存在することの意味は何？

存在についての問題を考察する哲学者たちは、周囲の世界から、世界の内の私たちの場所へと、目を転じるようになりました。人間の存在の本質、つまり私たちは個人としてどのように存在するのか、私たちは自分の人生に意味を見いだすことができるのか、ということ考察した哲学者もいます。

## 私たちには選択の自由がある

セーレン・キルケゴールは、人生に意味を見いだそうとしたが、神への信仰を決して失わなかった。

人間として存在するとは何を意味するかに目を向けた、最も有名な哲学者のひとり、19世紀デンマークの哲学者セーレン・キルケゴールがいます。存在についての哲学的説明は数あるが、自分がどういう人生を送るかについて、私たちには道徳的判断を下す自由があり、それこそが私たちの人生に意味を与えるのだ、とキルケゴールは考えました。しかし、この選択の自由は、私たちに必ずしも幸福をもたらしてはくれません。逆に、どんな選択をするのも自由だと知ると、精神が混乱し、私たちは恐怖や不安を感じます。キルケゴールの言うこの「自由の眩暈(めまい)」は、私たち自身の存在と個人的責任に気づくところから生じるものです。そこから私たちは、絶望して何もしないことを選択するか、不安から逃避せず「真正に」生きて人生に意味を与えるよ

うな選択をするか、決断しなくてはなりません。

## 可能性に気づく

私たちは自ら人生を自由にかたちづくるのだ、というキルケゴールの考えは、他の哲学者に引き継がれていきました。たとえばフリードリヒ・ニーチェは、しきたりや宗教が定めることを押しつけられるのではなく、自ら自分の可能性に気づくのが、各個人の責務だと主張しました。後にエドムント・フッサールは、もしカントの言うように、空間と時間から切り離された、私たちが理解したり経験したりできない、「物自体の世界」があるなら、世界について私たちがもっている観念はどれもただの推測にすぎない、という見方をしました。実践的なことが目的なら、それを無視して、私たちが経験するとおりの世界に注意を集中して差し支えないでしょう。フッサールはこれを「生活世界(レーベンスヴェルト)」と称しま

いったいなぜ存在があって、  
なぜいっそのこと無ではないのか？  
それが問題だ。  
マルティン・ハイデガー

## 自由思想

個人には、自分の人生をどうにでもしたいようにする自由がある、と考える哲学者もいる。社会の制約の範囲内で生きなくともいい、ということだ。

私たちには人生に  
自分なりの意味を  
見いだす  
自由がある。

した。私たちの経験に注意を集中するこの主観的アプローチを、マルティン・ハイデガーが受け継ぎます。ハイデガーによると、哲学は存在の意味を見いだそうとしてきましたが、存在を理解するには、まず私たちにとって存在するとは何を意味しているのかを、考察しなければならないのです。

## 人生の意味

ハイデガーの着想は、次世代の、特にフランスの哲学者たちに大きな影響を及ぼしました。20世紀後半に台頭したその哲学を表す、「実存主義」という新しい用語ができました。人間の実存を考察する——とりわけ、ますます神や宗教の影が薄くなってきた世界における、人生の意味や目的を探求する哲学です。実存主義の主要な哲学者、ジャン＝ポール・サルトルによれば、私たちはひとたび自らの実存を自覚すれば、人生に意味を与えるべく、自分自身の目的をつくりださなくてはなりません。

サルトルと同様、哲学者でもあり小説家でもあったアルベール・カミュは、さらに悲観的でした。私たちの人生には本来意味などなく、私たちの自己認識から生じる不安に対処するには、実存の無意味さと不条理を受け入れるか、まるっきり実存しないことにするか、どちらかを選択することになるというのです。

人は自由であるという刑に処せられている。  
なぜなら、いったん世界に放り込まれるや、  
自分のすることすべてに  
責任を負うのだから。

ジャン＝ポール・サルトル

## 実存的不安

自らの実存と自分に与えられた選択肢を自覚するようになったとき、私たちが感じる不安——「実存的不安」を、セーレン・キルケゴールは、絶壁のふちに立つときの感情にたとえた。私たちが不安なのは、落ちるのが怖いからだけでなく、衝動的に身を投げ出しそうになるからでもある。飛び下りるか飛び下りないか決めるしかないのだと、私たちは気づく。

